日本庭園について
英・仏語で出版された三冊の主要な書物

ジョサイア・コンドル『*Landscape Gardening in Japan*』（1893）
原田治郎『*The Gardens of Japan*』（1928）
田村剛『*The Art of the Landscape Gardens in Japan*』（1935）

ニコラ・フィエヴェ＊

19世紀、西洋が日本を発見した際――その発見は、ジャポニスムが席巻したヨーロッパや北アメリカの文人・芸術家・収集家たちの関心の潮流に先立つものであったわけだが――日本の応用芸術のうちでも最も洗練されたものの一つである庭園芸術は、確固たる熱狂を引き起こした。この点で庭園芸術は、日本の伝統的な木造住居とは異なっている。日本の木造住居は、新古典主義と金属建築の発展期にあった19世紀末のヨーロッパ人たちには、正当に理解されなかった。つまり蔑まれていたのである。アメリカと同様にヨーロッパでも、オリエンタリズムの流行、「日本的なるもの」に対する趣味は、多少なりとも日本庭園の形態を模した庭園の着想源となった。フランスの場合でいえば、アルベール・カーン（1860－1940）のブーローニュの庭園が良い例である。この庭園では、フランス式庭園（1895）、イギリス式庭園（1895）、日本庭園（1898）が隣りあっている。同様に、1893年に施工されたクロード・モネ（1840－1926）のジヴェルニーの庭園も良い例である。

カーンの庭園は、アルベール・カーンの招きで日本からやってきた庭師によってつくられた。古典的で博識なクロード・モネの水の庭園については、日本庭園に関する書物や図像をもとに、彼自身が着想したものである。初期には、絵画や版画、またとりわけ江戸時代の和本が、日本庭園についての知識源となっていた。そのため、一部の愛好家や収集家に限られるものでもあった。それに対し、写真や、ヨーロッパの言語（まず英語、そしてドイツ語とフランス語）で書かれた専門書は、より広く分散し、新しい媒体となっていく。

1893年――ジョサイア・コンドルと『*Landscape Gardening in Japan*』

日本とその文化に関する一般書でのわずかなコメントを除けば、日本庭園を扱った著作や論文は、『*Transactions of the Asiatic Society of Japan*』（日本アジア協会紀要）第14巻の出版までまったくなかった。この巻には、建築家ジョサイア・コンドルによる1886年５月５日の講演が収録されている。この講演は、1893年のコンドルの著作『*Landscape Gardening in Japan*』に再録されている。コンドルの著作は大判の豪華な装丁で（33×27.5cm）、160頁あり、庭の写真が40枚も掲載されている。『*Landscape Gardening in Japan*』は、すぐさま欧米の読者のあいだで大きな反響を呼び、アメリカやイギリスで庭園が作られる際の参考書となった。この書物は、出版以来とぎれることなく再版され続けた。はじめの再版はコンドル生前、1912年であり、２巻本として秀英舎から出された。それから1964年、今度はニューヨークのドーヴァー社「オリエンタリア叢書」から１巻本として、そして2002年にはロンドンのケーガン・ポー

＊フランス国立高等研究実習院（EPHE）歴史学・文献学部門教授
フランス国立極東学院京都支部（EFEO Kyoto）客員教授

ル社と東京の講談社から出版されている。

20世紀初頭、日本庭園を紹介した出版物は複数あったが、そのいずれも情報の詳細さという点でコンドルの著作には敵わない。そうした出版物は、そもそもコンドルの著作から着想を得ている。最も一貫しているのは、フランシス・ピゴット（1852-1925）の『*The garden of Japan : a year's diary of its flowers*』であり、これは1896年にロンドンのジョージ・アレン社から出版された。この書物は、日本の花を暦に沿って紹介しており、花に関連したいくつかの和歌の翻訳を載せている。またバジル・テイラー夫人の『*Japanese Gardens*』もある。これは1912年にロンドンのメスエン社から出版されたが、図版はなく、文章のみで、やや文学的であり、庭に関する伝説や物語を載せている。またマリ＝ルイーズ・ゴットハインの『*Geschichte der Gartenkunst*』は、1926年にイェーナのディーデリヒツ社から出版されたが、そのうち１章が日本のことに割かれている。総合的に見れば、出版から117年を経ても『*Landscape Gardening in Japan*』は、欧米言語のなかで無視できない参考書であり続けた。ところが1979年、イルムトラウト・シャアルシュミット＝リヒターによって『*Der japanische Garten: ein Kunstwerk*』が英・独・仏語で出版された。この書物は、庭園史の観点から見た歴史的・考古学的発見に焦点を絞っており、森蘊という日本庭園史の大家の学問的支持にもとづいている。

本論でいまさらジョサイア・コンドルについて長々と紹介する必要はないだろう。コンドルについては、近年も、いくつもの発表や研究がその著作を論じている。また建築家としてのコンドル、東京大学工学部の前身である1873年創立の工部大学校の教師としてのコンドルについても、大いに論じられている。1852年にイギリスに生まれたジョサイア・コンドルのあまり知られていない経歴に少しばかり触れておくとすれば、彼の建築家としての形成は、サウスケンジントン・アートスクールおよびロンドン大学でなされており、初期の仕事はウィリアム・バージェス（1827－1881）の設計事務所でのものであった。コンドルは、ロンドンの東洋学者と親しかったバージェスを通して、アジアの芸術や文明と接触を持ち始めたようである。1876年、24歳のとき、コンドルは工部大学校で教えるよう日本政府から招きを受けた。コンドルは、大学校で教えた８年間に23人の建築家を育てた。最も知られるところだけを記せば、明治日本の建築を担った者たち、すなわち日本銀行本店と東京駅を建てた辰野金吾（1854-1919）、京都帝国博物館を建てた片山東熊（1853-1917）、さらに曾禰達蔵（1852－1937）、久留正道（1855－1914）、佐立七次郎（1856－1922）などである。８年間の教授期間の後、ジョサイア・コンドルは当時最も有名な建築家となり、明治期の日本の公的な建物の作り手となった。そのなかには、いくつもの省庁の建物や、外務省の館である鹿鳴館も含まれる。新体制の贔屓の建築家となったコンドルは、いくつかの私的な邸宅も設計している。有栖川宮邸（1884）、海軍大臣官舎（1892）、岩崎久彌邸（1896）、岩崎彌之助別邸（1908）などである。

コンドルは青年期、画家になることを夢見ていたが、父の早すぎる死によってその夢を諦める。しかし、彼は生涯を通じて芸術をこよなく愛し、余暇の時間を芸術、とくに日本芸術の知識を得ることに捧げた。落語を勉強し、前浪くめの教えのもとで自分でも実践した。1893年にはくめと結婚し、1920年に東京の彼らの家で最期の日を迎えるまで連れ添った（くめは1920年６月10日、ジョサイアは同月21日に亡くなった）。コンドルの著作はどれひとつとして西洋建築のことを語っておらず、すべて生け花、落語、書画、庭など日本のものについて語っている[1]。

1886年５月５日、ジョサイア・コンドルは、日本アジア協会の権威ある聴衆の前で、「*The Art of the Landscape Gardening in Japan*」という講演を

おこなった。紀要第14巻補遺のこの協会のメンバーリストに挙がっているのは、以下のように権威ある人物たちである。中国学者で外交官のトマス・ウェード（1818－1895）、サンスクリット学者のウィリアム・ウィズニー（1827－1894）、日本学者で外交官のアーネスト・サトウ（1843－1929）、コンドル以前に工部大学校に勤務したウィリアム・アンダーソン（1843－1896）やジェイムズ・ガーディナー（1857－1925）といった建築家、初の日本文学史を著した日本学者のウィリアム・アストン（1841－1911）、日本の芸術と文学について８巻にわたる歴史書を残したフランシス・ブリンクリ大尉（1841－1912）、東京帝国大学教授で古事記を初めて英訳した日本学者のバジル・チェンバレン（1850－1935）、日本語をローマ字に転写した宣教師のジェイムズ・ヘボン（1815－1911）、京都の同志社大学の教会と礼拝堂の設計をした司祭のダニエル・グリーン（1843－1913）、そして『*Japanese Homes and Their Surroudings*』[2]の著者として建築家や考古学者たちによく知られている動物学者のエドワード・モース（1838－1925）である。

ジョサイア・コンドルが著作を著したとき、大学では、園芸学も庭園史（ヨーロッパおよび日本）も教えられてはいなかった。庭の構成の原則を記した近代的な書物は一切なかった。東京には10年あまり住んだだけのコンドルであったが、彼には実際の経験にもとづく知識があった。「雇ひ外国人」としての公的な立場から、この若い建築家はたくさんの住居や古い邸宅を見ることができた。とりわけ、明治20年代はまだ、江戸時代の大名の大きな庭が多く残っていたのである。

コンドルは、1886年に出版された紀要のテクストではまったく資料に触れていないものの、1893年の書物の序文では、江戸時代や明治時代の資料を10以上も引用している。大学教師をしていたのだから、コンドルはそうした資料を参照できたにちがいない。しかし注意深く読むなら、コンドルはそうした資料から図版を取り入れているが、本文には目を通していないようである。この前年、東京や京都で披露された建築の概要図が示しているように、コンドルは建築家であり、彼自身絵が巧みであったが、書物のなかにはコンドル自身の手によるスケッチや設計図は１枚としてない。そ

図版１：『*Supplement to Landscape Gardening in Japan*』(1893), plate XIV

のことを彼は『*Supplement to Landscape Gardening in Japan*』と題された著作の第２巻序文の冒頭で次のように述べている。

> 第１巻の図版はほとんど全部一次資料からとった木版画である。これはデザインの正確な解明にとって重要な方法である。さらに、この方法は昔の芸術の真なる精神を伝えるのに、すべての側面において最も良い方法を供給するものである。

コンドルが引用した資料のリストを実際に検証してみよう。日付はほとんど間違っている。

１）最初に引用されているテクストは『築山庭作伝』で、作成日も作者も不明。そしてそれは『余景作り庭の図』を19丁にまとめたものである。『余景作り庭の図』は1680年に匿名の作者によって出版され、菱川吉兵衛、実の名を師宣によって描かれたもので、コンドルは誤ってこの師宣が文章を書いたとしている。浮世絵の作者で、江戸の一町民であった師宣は庭の専門家ではなく、彼が京都を訪れたとはほとんど考えられない。庭についての知識がどこからきたかはよくわかっていない。コンドルの本の図版の52、53、54はこの本から採られている（図版２）。

２）『築山庭造伝』は、北村援琴斎によって1735年に書かれた本で、続く世紀に秋里離島によって完成させられ、題に「前編」と加えられて出版された。コンドルは1737年と記しているが、どうもコンドルが持っていたのは1828年出版の贋作であるように思われる。築山庭造伝は、庭園史にとって重要な著作で、『嵯峨流庭古法秘伝書』と『築山山水伝』という、より古い著作からその主要なテクストを援用している。図版の10、14、15、27、28と版画VIIはこの著作から採られている。

３）『都林泉名勝図会』は、秋里離島によって、1799年に５巻本として出版された。この書物は、100以上の京都の有名な茶室を持つ寺院や庭を分類し、それらの説明やときとして図を記している。ジョサイア・コンドルによって参照されている秋里の３つの異なる著作のうち、『都林泉名勝図会』は、江戸時代に大成功を収めた。その大成功は、そのコピーが大量にあることによっても証明されている。京都の有名な庭が江戸やほかの都市の庭の模範となっていた時代にあって、本書が成功をおさめたのは、図版の質の高さのためだろう。コンドルの本の図版の５は本書から採られている。

図版２：『築山庭作伝』の版画（左）『*Landscape Gardening in Japan*』（右）

４）『草木育種』は1818年、岩崎灌園の弟子で植物学者である阿部櫟齋によって出版された。本書は、平賀源内の版によって日本に普及した陳淏子『秘伝花鏡』から、多く引用している。『草木育種』は、鉢植え植物の栽培や、盆栽の手入れの方法、松の木の手入れの方法、植物の市や暦、庭師の道具などについて、次から次へと述べており、末尾にはいろは順に並べられた植物のインデックスが付されている。櫟齋はこれを42枚（84頁）に系統ごとにまとめている。コンドルはこれを参考文献に入れてはいるものの、実際には使わなかったようである。

５）『築山庭造伝後編』は1828年、秋里離島によって３巻本で出版された。これはおそらく、庭について江戸時代に書かれた最も有名な書物である。作者についてはほとんど分かっておらず、彼がどのように身を成したのか、庭についての知識はどこからきているのかなども分かっていない。だが、この作者が作中で書いたことは、日本の庭園芸術を長きにわたって左右し、ジョサイア・コンドルの日本庭園の見方にも影響を与えている。本書は築山山水、坪庭、茶庭の真・行・草について順に述べ、その後、手水鉢や石燈籠のさまざまな類型について語る。そして『都林泉名勝図会』には載っていなかった有名ないくつかの庭の紹介で終わる。コンドルの本の図版11、13、23、26、46、49と版画Ｘは、この著作の版画の複製であり、XXV、XXVII、XXVIII、XXIX、XXX、XXXI、XXXIIIはこの本から着想を得ている。

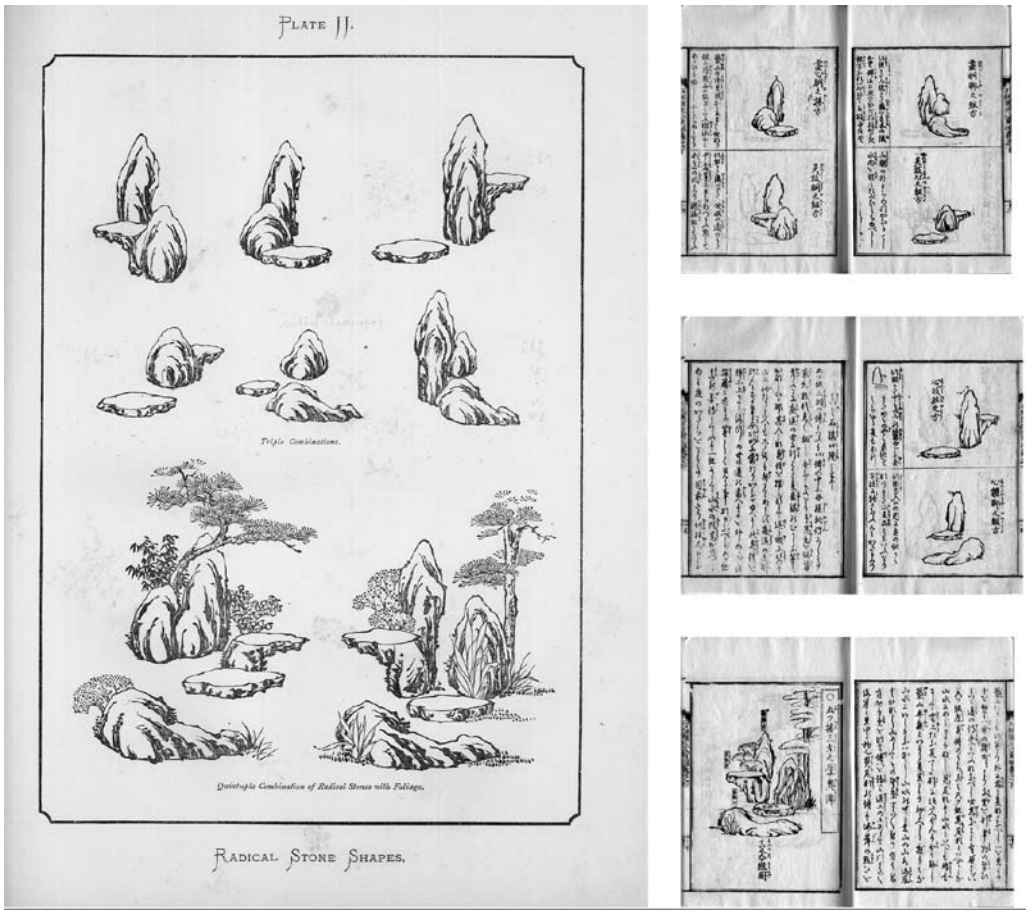
６）『石組園生八重垣伝』はコンドルが引く、秋里離島最後の書物である。1827年出版。庭のさまざまな部分、垣、橋、井戸、石、飛び石、石燈籠、手水鉢などのカタログである（図版３）。コンドルの著作の版画I、II、III、IV、IX、XI、XIV、XV、XVI、XVII、XVIII、XIX、XX、XXIIは、この本から採られている。

７）『築山山水伝』には出版日も著者も記されていない。江戸時代にいくつもの版が出版されており、30丁からなるもの、あるいはそれに第二分冊として16丁分、茶道の概要を加えたものがある。図版の多くは、『嵯峨流庭古法秘伝之書』から採られており、テクストは室町時代のものである。1395年版と1475年版がある。コンドルの参照しているもののなかで最も古いのは、これらの図版とテクストだが、いずれもコンドルの著作に取り入れられてはいない。

８）『園芸考』は図版を含まず、1889年、横井時冬によって書かれた。彼は日本産業史の専門家であるが、この時期から1906年に亡くなるまで、園芸学の研究に身を投じた。この時期は東京の近代的近郊計画が誕生する時期にあたり、造園学を発展させようという当局の意志が強かった。横井は応用技術の著作を３つ書いている。園芸考のほかに、1904年に出版された『藝窓雑載』は１章分を日本園芸史に割いている。さらに『日本庭園発達史』は、彼の死後34年経って堀口捨巳と森蘊によって出版された。『園芸考』において横井は初めて、園芸学という角度から、また庭園技術の再読を試みている。参考文献に挙げられてはいるものの、この著作はコンドルのテクストに影響を与えてはいない。

９）『図解庭造法』は、本多錦吉郎によって1890年、東京の團々社から出版された。彼は洋画家であり、庭と茶室についての複数の書物を出版している。これは近代的な著作であり、江戸時代の書物、とりわけ秋里の『築山庭造伝後編』から着想を得ており、日本語で書かれた２巻本である。13丁からなるテクスト１巻と26の図版を載せた横長の1巻から成る。図版10、34、45と版画IXの一部の図版、そして版画XXIII、XXV、XXVI、XXVII、XXVIII、XXIX、XXX、XXXI、XXXII、XXXIXはこの著作から採られている。XXXIII、XXXV、XXXVIの３つの版画は本多によって描かれたが、この本には載っていない。

10）1892年大阪で高津忠五郎によって書かれた『築山山水庭造秘伝』は11丁のテクストと６つ



図版３：『*Landscape Gardening in Japan*』（左）
『石組園生八重垣伝』の版画（右）

の図版を含む一巻本である。この著作は1723年出版の『築山山水伝』と内容は同じで、コンドルの著作で使用されていない。

また別の江戸時代のテクストから引いてきたいくつかの珍しい図版を除けば、コンドルの著作の図版はすべて、これら参考文献に由来している。コンドルは『古今茶道全集』という、引用してはいない著作から図版を採ってきている。これは紅染山鹿庵によって、1694年、京都で５巻本として出されたもので、最後の巻は49丁にわたって図版を多く用い、茶庭のリストを挙げている。この５巻のみが元禄時代に、『諸国茶庭名跡図会』という題名で出版された。コンドルの本の図版２、31、42、50、51、55がこの本から採られている。

これら資料の全体をみたとき、最も面白い側面の一つが、ほとんどが江戸時代のもので、江戸に生きた人の手によって書かれているという事実である。コンドルは彼自身、新たな首都である東京に住んでいた。この意味において、彼の概論は何よりもまず関東の庭や園芸技術を表現しているのであって、それはときとして、世俗的にも仏教的にも、園芸芸術を昔から育んだ京都のそれとかけ離れたものであった。確かに橘俊綱の『作庭記』は参考文献にあがっているが、近代的な校訂版が

まだ出版されていなかった時期に読むことは困難であり、コンドルの研究に影響を与えたとは思われない。

第２巻は写真集だが、これはコンドルの著作にとって東京の庭がいかに中心的な位置を占めているかを明瞭に示している。写真家の小川一眞による写真40枚のうち、５枚だけが京都の庭を写している。その５つとは御所の池之庭、金閣の庭、銀閣の庭、滴翠園、そして西本願寺の大書院庭園である。最初の４つは歩ける庭であるが、部分的に京都の庭園芸術、とりわけ枯山水の技術を示している。40枚のうち、石庭の独特な例を示しているのが西本願寺の大書院庭園である。他の写真は３つの名所（松島、石山、箱根）のどれかであり、25枚の東京と当時の郊外の庭の写真があり、あと７枚は日本の他の場所の写真である。30を越えるこれらの写真が示すのは、かつての大名の住居の広大な庭園と、７つの東京郊外の茶屋の庭園の独特なスタイルである（図版１）。

資料を引用するにあたって、ジョサイア・コンドルは冒頭で次のように述べている。

> 著者は、本書の主題を図示するために、これらの本を自由に援用した。本多氏の近著では、北村の『築山庭造伝』から取られた庭の図表が、リトグラフによって近代的なスタイルで描かれている。いくつかの図版は、本多氏の親しいリトグラファー小柴氏によって本書のために複製されたものである。両氏には深く感謝申し上げる次第である。[3]

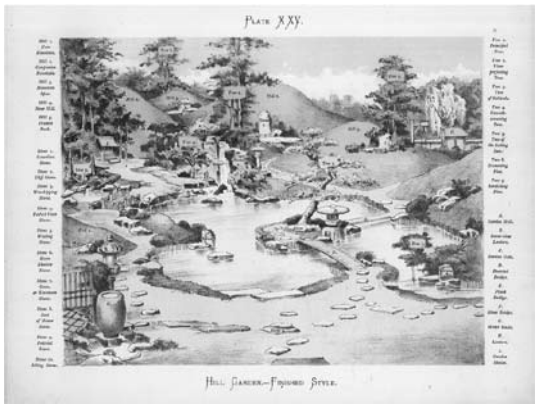
本多錦吉郎に対する感謝は、実質的には当然のことであった。コンドルは、本多から借りた17枚のリトグラフに加えて、３年前（1890）に東京で出版された本多の書物から多くを借りている。ほどんど本文を自由に英訳したようなものであった。本多の著作は『*Landscape Gardening in Japan*』の骨格を成しており、コンドルはそこにいくつかのコメントと、1886年の論文の文章をいくらか加えて、内容を豊かにしたのだった。

コンドルのテクストは、本多のテクストと第１章しか違わない。その章は、大名の11の庭園について記述したもので、日本語のオリジナルには見られない。第10章「Ornemental water」も同様である。第11章の最初の３頁「Garden vegetation」は、本多の本から採ってきているが、庭の装飾に使用される植物の名前のリストは完成度が高く、また日本語とラテン語で書いている。これは別の資料から採ったもので、矢田部良吉の『日本植物図解』という、日本語と英語で書かれた大作である[4]。矢田部は帝国大学の同僚で、コンドルは『*The Flowers of Japan*』という本のため、２年前すでに彼と仕事をしていた。この本で彼はすでに生け花に使われる460の花を、暦にしたがってリストにしていた[5]。論述の残りの部分に関しては、細部をを除けば、２つのテクストの内容はよく似ている。

にもかかわらず、庭園史という観点からすれば、本多の著作はいくつかの問題を提起せずにはおかない。本多錦吉郎は、その著作を書いたとき、歴史家としても、園芸家としても、まして庭師としての養成も、受けてはいなかったのである。1850年に生まれ、洋画家としての教育を受けた本多画伯は、絵画、とりわけデッサンのモデルについての著作を複数書いていた[6]。初めての庭園についての著作である『庭造法』を書いたのは40歳のときだった。その著作の革新的な点は40枚の庭の図版を西洋的な遠近法で描いたことである。これは、62年前に秋里離島によって出版された『築山庭造伝』の図版をかなり忠実に描き直したものであった（図版４～６）。絵は本多によって付け加えられた６つの版画、馬車回しおよび通路によって終わっており、そこに日本的・西洋的な景観のモティーフが混ぜ込まれている。『庭造法』は庭のコンセプトの基本となった。生活が近代化されていくなかで、西洋風の庭園がほとんど知られて

図版４：秋里離島『築山庭造伝後編』（1828）の版画

図版５：本多錦吉郎『図解庭造法』（1890）の版画



図版６：『*Landscape Gardening in Japan*』（1893）の版画

いなかった時代にあって、この本が成功したのは、絵の近代性と文章の明瞭性によるものと言えるだろう。

テクストに関しては、本多は『築山庭造伝』の２巻の重要なくだりをまとめ、十数頁にわたる序文ののち、絵ごとにコメントをつけている。眞体假山全図、行体假山全図、草体假山全図と平庭のための真・行・草の３つのカテゴリー、そして様々な種類の景観の全体、こうしたものが垣、橋、石灯籠、石の丸池などの庭の諸要素のカタログを完全なものとしている。

『庭園と景観』という雑誌に1935年に載った「コンドル博士の日本庭園観」という論文の中で、西洋庭園史の専門家である針ヶ谷鐘吉は、それよりも早く出版されたコンドルの著作の批評を試みている[7]。彼はまず日本の庭園芸術を、その庭園史のみならず庭園の場所、素材、設計の紹介をもって国際的に知らしめた本に敬意を表している。またこの著作がイギリスやアメリカで日本式庭園を作る際のマニュアルとして使われたことも正確に記している[8]。賛辞に続いて、コンドルの知覚、さらには西洋の観察者一般に対して正当な非難がされる。彼はその知識が、針ヶ谷が崇高な価値を認める京都の庭園と室町時代の著作を無視して、東京の庭と江戸時代の著作に基づいていることを非難している。この時代特有のナショナリズムとして解されるこの批評が部分的に正当化されるにしても、本多の著作への言及がまったくないのは驚くに値する。他方で針ヶ谷は、同誌の144頁で本多の造園家としての仕事に敬意を表している[9]。

画家、彫刻家、写真家の顔を持つ多才な芸術家である本多は、1897年、造園家としてのキャリアをスタートさせた。造園学が徐々に近代的学問となる時代に、大学で造園学者として養成された本多は、風景を描く画家が造園家となり庭師を導くという、昔ながらの伝統を再開したのであった。針ヶ谷は本多の手になる、1897年から彼の死の３年前にあたる1918年までにつくられた、32ヶ所の庭園を挙げている[10]。この期間に本多は日本庭園株式会社の技術長となっている。1902年、本

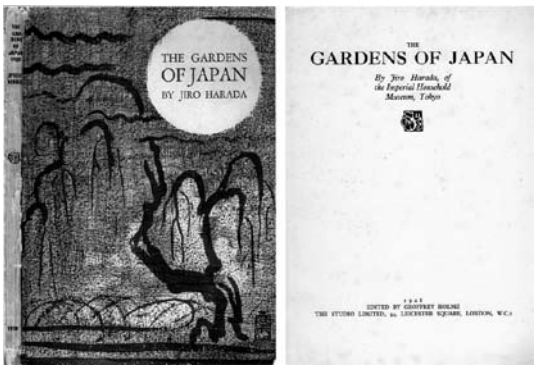
多はアメリカ建築学院での発表のためにアメリカに招かれた。この発表で、本多は『庭造法』の主となる内容を述べている[11]。そして彼はついに最も有名な庭についての本『日本名園畠譜』の出版の仕事をする[12]。この著作は、序文で述べられているように、多くの人々に庭園芸術を知ってもらうことを目的とすると同時に、「名園の眞景を永く後世に保存すること」を目的としていた。本書は、29ヶ所の主要な庭園を、歴史的な紹介と、本多の手に成る67枚の版画、設計図とデッサンによって紹介したものである。最初の著作とは異なり、紹介される庭園はすべて、かつての首都、京都のものである。著作はまず仙洞御所の庭園に始まり、それから桂離宮の庭園、修学院離宮の庭園と続き、その後に京都の主要な寺院の庭園が紹介される。

1928年 —— 原田治郎と『*The Gardens of Japan*』

ジョサイア・コンドルの本の出版から35年、ロンドンで、この主題について初めて日本人の著者、原田治郎による『*The Gardens of Japan*』が出版された。アカデミックな世界の人間でもなく、造園家でもなく、美術史の専門家でもない原田は、明治11年、山口県に生まれた。彼は15歳で家を出、アメリカにわたり、中等教育を終え、カリフォルニア州の大学に入った。サン・ルイの万国博覧会の後、日本へ戻ると、彼は名古屋興業高等学校の英語教師となった。翌年には、ロンドンで開催された日英博覧会にあわせてイギリスへ赴き、その滞在期間のうちに雑誌『*The Studio*』とその創刊者チャールズ・ホムと連絡をとっている。この出会いをきっかけとして、実り多いコラボレーションが生まれる。原田は日本の文化・芸術を英語で人々に知らしめることになった。原田はかわらず英語教師として働きながら、1927年以降、定期的に帝室博物館に協力していく。戦後にはこの博物館の常勤の役人となり、英語の目録やカタログ、展覧会の紹介文を担当した。

1893年ロンドン創刊の雑誌『*The Studio*』は、チャールズ・ホムによるものだが、ホムは19世紀末から20世紀初頭の芸術における重要人物である。1910年から1928年にかけて、原田治郎は『*The Studio*』のために日本の芸術について10本の論文を書いている。それは寺院について、絵画について、建築についてのものであり、この時期は庭園と建築についての２つの特集号の出版をもって区切られる。その特集号とは『*The Gardens of Japan*』 と『*The Lesson of Japanese Architecture*』である。第二次世界大戦後の1956年、原田はこの雑誌に、浜離宮恩賜庭園についてと盆栽についての２つの新しい論文を書き、さらに庭についての第２巻を出版する。題名は『*The Japanese Garden: Successor to the Garden of Japan*』（1956）である。1937年に出版され、国際文化振興会によって世界中に広められていた『*A glimpse of Japanese ideals: lectures on Japanese art and culture*』は彼の代表作であり続け、その目的は、西洋の人々に日本の伝統芸術や文化を知ってもらうことであった。

『*The Gardens of Japan*』は庭園の歴史や紹介などを短く簡素に述べた39頁と、139頁にわたる庭園のモノクロ写真からなり、これらの写真のうち半分は美しいグラビアである。原田がまったく言及していないコンドルの著作とは違って、簡単に



図版７：原田治郎『*The Gardens of Japan*』（1928）

奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代、現代とそれぞれの特徴を年代別に記している。とくに詳しいのは明治維新以降の庭園の現代史についてである。引用してはいないが、確実によく資料にもとづいている。彼は茶人がいかに貢献したかを述べ、江戸時代の大名がいかにして明治時代、自然主義的な態度を追究しつつ古い習慣を再び蘇らせたのか、つまり古い私有地が公園へと変化したかを明瞭に説明している。ジョサイア・コンドルの著作にはない歴史的正確さがここには見られる。

原田の著作の第２部は、庭のスタイルを扱っている。作庭記について短く触れているが、先達の本多やコンドルと同様、秋里の『築山庭造伝』の版画をもとに発言しており、また、真・行・草のカテゴリーにしたがって庭のスタイルについて紹介をしている。文人の庭について述べているのは革新的である。そのスタイルは京都の石川丈山によって始められた。

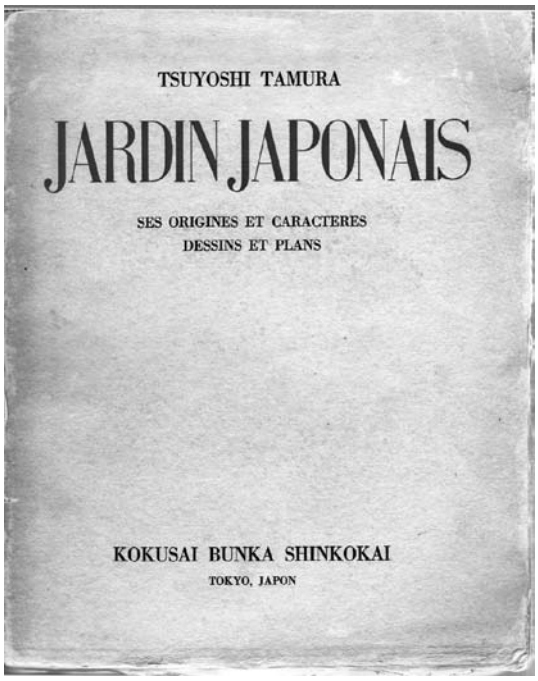
第３部と最後の部は庭の様々な部分と設備について述べられている。「滝」、「小川」、「池」、「丘」,「島」、「橋」、「石」、「飛び石」、「砂」、「木々と植物」、「井戸」、「泉池」、「燈籠」、「腰掛けとあずまや」がよく配分され１章を成している。とりわけ最後の２つの章に関して目新しさがほとんど見られないにしても、原田治郎の本は日本の「自然に対する感性」について主観的なコメントからは免れている。それはコンドルが免れきれなかったものであり、原田はそれぞれの庭園に独特の性格を与えたいろいろな茶人、芸術家、文人についてのコメントや逸話を最重要視しているのである。

1935年と1937年――田村剛と『*The Art of the Landscape Gardens in Japan*』および『*Jardin japonais : ses origines et caractères, dessins et plans*』

端的に言えば、『The Art of the Landscape Gardens in Japan』は、このテーマについて西洋言語で書かれた最良の書物である。著者の田村剛は岡山県に生まれ、東京帝国大学農学部で学び、1920年に東京帝国大学農学部林学博士となった。森林の技術者であり、造園家であり、庭園史を専門とした田村は、その学術的活動によって、当時最も有名な専門家となった。1918年に田村は、博士論文の試問に先立って、造園についての概論を出版する。田村はこの著作で日本で初めて「自然公園」の概念について正確に述べている。この概念は、その後の田村の仕事の軸となっていく。博士号を手にした田村は、内務省衛生局保健課嘱託の職を得る。以後、田村は公園や自然公園の計画と、造園学や大学教師の仕事を同時におこなっていく。今日の国立公園や自然公園や海中公園のシステムのコンセプトを考えた一人たる田村は、大学の農学部で庭園学や風景の実践などを教えつつ、次々と西洋の庭園や後楽園の歴史、作庭記についての長大な研究を出版する。1964年の作庭記に関する研究は、当時の最良の研究であった。日本庭園協会、国立公園協会、日本自然保護協会の卓越したメンバーであった田村は、そのとき74歳であった。

1935年に英語で、その２年後にフランス語で出版された田村の本は、1937年のパリの万国博覧会に際して出版されたもので、ポール・クローデルの序文が付けられており、著者の多才な能力を示している。この本を書いたとき田村は、19世紀末以来文献学的にも、また庭園のプランの検討という点においても、重要性を増しつつあった当時の庭園史の知識を利用できた[13]。

田村剛の文章の近代性は、その主題的・分野的アプローチが多岐にわたることに感じられる。今日意味するところの空間の考古学といった本ではなく、田村は庭を、それを知覚する人間とのかかわりにおいて、つまり庭を日常として生きる人間との関わりにおいて考え、紹介しているのである。田村は家と庭を、切り離すことのできない実体として語り、さらにそれを歴史的な観点に据え、文化史的な言葉で語っている。このことが、田村の

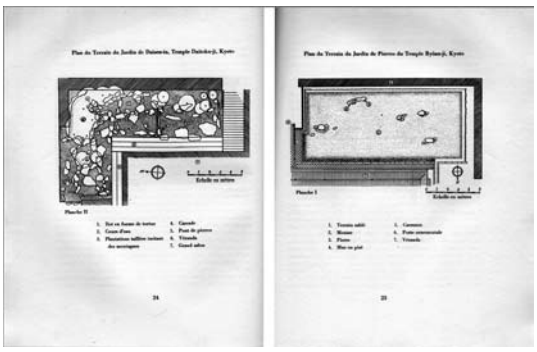


図版８：田村剛『*Jardin japonais : ses origines et caractères, dessins et plans*』（1937）

文章に当時としては新しい学問的な厚みを与えている。田村自身、それまで書かれた同テーマの著作を批判しているように思える。

田村は第１章から、庭園芸術を詩的・文学的・絵画的な古い伝統の内部に位置づける。庭を知覚することは、広大な自然をミニチュアの世界として表象することであり、その内部に住まいを完結させようとすることである。田村はそう述べつつ、山水画芸術を紹介し、多くの場合応接間を飾っていた要素（山や水、海、湖、滝など）を表した風景画の影響を強調する。石（これは樹木よりも好まれる）を通じて、偉大なる自然が表現されるのであり、それこそが日本庭園において重要なものだという[14]。つまるところ、自然の表象は自然を小さくコピーしたものではなく、抽象化の産物であり、それはときとして庭を非現実的なものにしてしまう。美学的に言えば、時間の経過は作品とならなければならない。つまり、木々や石は苔に覆われ、鉄はさび、銅は酸化し、丸太や石は時によって横たえられている必要がある[15]。

第２章で展開される庭園史では、様々な昔の庭をとりあげている。これらの庭が今日に残している跡は、建長寺や称名寺など、いずれも13世紀に建てられた寺院の庭園の原形を示しているという。禅の貢献、夢想漱石などの僧、雪舟、相阿弥などの画家の決定的な役割は、室町時代の庭の発展に寄与したことである。この時代の庭の外観は、中国の景観画から多く着想を得ている[16]。田村ははじめて龍安寺の庭の図面を書き、庭を形成する石についての記述を載せた。そして室山時代の茶人の貢献の紹介、捨石の紹介、飛石の紹介が続く。庭園を建築物に結びつけつつ、田村は日本の建築の歴史を同時に手短かに示す。その歴史には寝殿造、書院造などの大まかな建築様式が含まれている。江戸時代は庭園芸術の京都から江戸や他の風土へ形態やスタイルが拡散したことによる革新の時代として紹介される。参勤交代によって可能になった拡散である。人や景観の形態が循環することで、日本の有名な土地の表象が発展することとなった。その中には東海道五十三次や京都の有名な場所、そして築山で表現される富士山などがある。



図版９：田村剛『*Jardin japonais*』（1937）
大仙院(左)・龍安寺(右)の図

第３章「*Dessin du jardin japonais*」は、間違いなくこの著作でもっとも興味深い部分であるが、先人たちのように様々な庭の形態やその構成要素を分類整理している。構成の原則を書くだけでなく、それを歴史的な観点に置き直しており、それは有名な庭を解釈するのに非常に有効であって、コンドルも原田もそれをしていない。例えば、秋里の1828年の『築山庭造伝』で言及されていた真・行・草の庭園様式は、江戸時代という環境に特有のものとされ、説明を加えているが、コンドルの本にも原田の本にもそのような説明はない[17]。真体がつねに応接間のためのものであった一方、草体は、構成要素の詳細を緩和し、寝室や茶の間のまわりに配された庭園によりあうものであると理解される。同様に、室町時代に発展した、主石、添石、客石などの構成要素の基本的な原則、庭奥左から手前右へ庭の流れるを表す「勝手」という手法を庭の概念に手慣れた田村が説明している[18]。田村は彼のテーマを完全に自分のものとし、基礎的な原則についてシンプルな説明を行う。様々な時代の構成要素の原則の複雑な総体の中にあって、コンドルの著作も原田の著作もなしえなかったことである。田村の本は、明晰に西洋の言語で書かれたものとして、とても独特である。

おわりに

本論で紹介した３つの著作は、日本庭園を西洋世界に紹介し広めるうえで、間違いなく重要な契機であった。これらの著作は、それぞれ空間の専門家であると同時に教師であり、またイギリスの建築や日本の庭園の実践家であった人物によって書かれており、庭園およびその実践と概念に関する重要な情報源であり続けている。

コンドルは、このテーマについて西洋史上最初の著作を書き、江戸時代の図版を無数にまとめた書物を出版した。1945年以降、日本庭園に関する書物は豊富だが[19]、日本人でない読者を対象に、日本の古い庭園の世界について書かれている。コンドルは東京の庭しか知らず、江戸で出版された情報源をもとにし、庭の専門家でもなく、東京出身である本多の著作を参考にしている。コンドルの庭の知覚は、時代的にも、地理的にも、学術能力の観点からしても、三重にゆがめられている。コンドルは江戸時代と明治時代の庭園の緩慢な発展しか知らないし、東京周辺の庭園様式しか理解していない。近代的な庭の原則やコンセプトの分析を可能にする言語的な手段も学術的な手段も持ち合わせていない。それでもコンドルは豊かな著作を生み出した。けれども、19世紀の西洋人としての主観的な見方によるコメントもあり、まちがいや大きな見落としもある。

その後、歴史を扱うテクストとして、西洋の言語で、一様でない総論から諸要素を引き出し、本質に迫ろうと試みたのは、田村剛の著作である。20世紀後半、考古学的にも文献学的にも碑文学的にも、研究がいちじるしく進展し、出版も盛んになる。そうした研究は、わたしたちの歴史理解を鋭敏にし、日本のさまざまな場所についての知識を広げた。けれども、75年前に田村剛の論考が提示した庭についての基本概念や基礎原理は、いかなる問題も再燃させてはいない。このことはまさに田村の正しさを証明しているだろう。

※本論の日本語訳にあたっては、フランス国立極東学院京都支部（EFEO Kyoto）リサーチ・アシスタントの岡本源太、橋本周子、山本友紀の各氏の助力を得た。記して感謝したい。

注

1　« The Art of the Landscape Gardening in Japan », *Transactions of the Asiatic Society of Japan*, vol. XIV, Yokohama, R. Meiklejohn & Co., 1886, p. 119-175 ; « The theory of Japanese Flower Arrangements », *Transactions of the Asiatic Society of Japan*, Vol. XVII, part 2, Yokohama, R. Meiklejohn & Co., 1889, p. 96 ; *The Flowers of Japan and the Art of Floral Arrangement*, with illustrations by Japanese artists, Tōkyō-Yokohama, Hakubunsha-Kelly and Walsh,

1892, xii, 136 pages ; *Landscape Gardening in Japan*, Tōkyō, Hakubunsha (published and sold by Kelly and Walsh), 1893, xi, 161 pages, 37 plates ; *Supplement to Landscape Gardening in Japan*, with collotypes by K. Ogawa, Tōkyō, Hakubunsha (published and sold by Kelly and Walsh), 1893, 40 pages, xl leaves of plates ; *Paintings and Studies by Kawanabé Kyōsai : an Illustrated and Descriptive Catalogue of a Collection of Paintings, Studies, and Sketches*, by the above artist, with explanatory notes on the principles, materials and technique of Japanese painting by Josiah Conder, Tōkyō, Maruzen, 1911, xvii, 131 pages ; *The theory of Japanese Flower Arrangements*, New York, The Empire State book, 1936, 88 pages.

2　Edward S. Morse, *Japanese Homes and Their Surroundings*, with illustrations by the author, London, Sampson Low, Marston, Searle, and Rivington, 1886, xxxiii, 372 pages.

3　Josiah Conder, *opus cit*., 1893, « Preface », p. VI.

4　矢田部良吉『日本植物圖解 *Iconographia floræ Japonicæ : or descriptions with figures of plants indigenous to Japan*』、東京、丸善、第１巻：明治24年、第２巻：明治25年、第３巻：明治26年。

5　*The Flowers of Japan, opus cit*., p. 25-37.

6　本多錦吉郎『小學畫手本』、東京、團々社、全12巻；『梯氏畫學教授法』、東京、文部省、明治12年。

7　針ヶ谷鐘吉「コンドル博士の日本庭園観」、『庭園と風景』第17巻１号、昭和10年、７-９頁。

8　「本書は日本庭園史上特異な様式として發達し來ったものであること」、同上、７頁。

9　針ヶ谷鐘吉「造園家としての本多錦吉郎畫伯」、『庭園と風景』第17巻１号、昭和10年、144-148頁。

10　同上、145-146頁。

11　Honda Kinkichirō, « Japanese Gardens », Glenn Brown (ed.), *European and Japanese gardens ; papers read before the American Institute of Architects*, American Institute of Architects, Philadelphia, Henry T. Coates & Co., 1902, p. 129-156.

12　本多錦吉郎『日本名園圖譜』、東京、小柴英、明治44年、全41頁。

13　小澤圭次郎『庭園の芳書』針ヶ谷鐘吉編、東京、東京農業大学造園学科、昭和44年、全76頁。

14　Tamura Tsuyoshi　田村剛, *Jardin japonais : ses origines et caractères, dessins et plans*, Série A-n° 8, Tōkyō, Kokusai Bunka Shinkokai, 1937, p. 8.

15　*Ibidem*, p. 11.

16　*Ibidem*, p. 18-20.

17　*Ibidem*, p. 56-57.

18　*Ibidem*, p. 74-77.

19　Irmtraud Schaarschmidt-Richter, *Der japanische Garten : ein Kunstwerk ; mit einem Aufsatz zur Gartenforschung von Osamu Mori, Fribourg*, Office du Livre, 1979; David Engel, *A Japanese touch for your garden*, Tōkyō, Kodansha International, 1980; Wybe Kuitert, *Themes, scenes, and taste in the history of Japanese garden art*, Japonica Neerlandica vol. 3, Amsterdam, J.G. Gieben, 1988; Günter Nitschke, *The architecture of the Japanese garden : right angle and natural form*, Köln, Benedikt Taschen, 1991.

参考文献

・コンドルが参照したもの

(11世紀？) 橘俊綱『作庭記』

(1680)『余景作り庭の圖』全１巻１冊22丁（別タイトル『菱川築山圖庭尽』、『築山庭作傳』、『菱川余景作り庭の圖』）

(？)『築山山水傳』全１巻１冊30丁

(1735) 北村援琴齋『築山庭造傳』全３巻３冊（上35丁）（中19丁）（下27丁）

(1799) 秋里離島『都林泉名勝圖会』全５巻５冊

(1818) 阿部櫟齋『草木育種』、江戸、山城屋佐兵衛、全２巻２冊（上34丁）（下42丁）

(1827) 秋里離島『石組園生八重垣傳』全２巻２冊（上32丁）（下31丁）

(1828) 北村援琴齋、秋里離島『築山庭造傳前編』全３巻３冊（上35丁）（中35丁）（下33丁）

(1828) 秋里離島『築山庭造傳後編』全３巻３冊（上著丁）（中33丁）（下33丁）

(1889) 横井時冬『園藝考』東京、全152頁

(1890) 本多錦吉郎『圖解庭造法』東京、團々社、全39丁

(1892) 高津忠五郎『築山山水庭造秘傳』大阪、全17丁

・コンドル、原田、本多錦、田村の著作

Conder, Josiah, « The Art of the Landscape Gardening in Japan », *Transactions of the Asiatic Society of Japan*, vol. XIV, Yokohama, R. Meiklejohn & Co., 1886, p. 119-175.

————, *Landscape Gardening in Japan*, Tōkyō, Hakubunsha (published and sold by Kelly and Walsh), 1893, xi, 161pages, 37 plates.

————, *Landscape Gardening in Japan*, 2nd and rev. ed., Tōkyō, Shuyeisha, 1912, xi, 161pages, xxxvii leaves of plates.

————, *Landscape Gardening in Japan*, with the supplement of forty plates & a new preface by Clay

Lancaster, New York, Dover (Dover Orientalia), 1964, xv, 251 pages, xxxvii pages of plates.
————, *Landscape Gardening in Japan*, London, Kegan Paul, 2002, 161 pages.
————, *Landscape Gardening in Japan*, with the author's 1912 *Supplement to Landscape Gardening in Japan*, foreword by Azby Brown, afterword by Terunobu Fujimori, Tōkyō, Kodansha International, 2002, 247 pages.
————, *Supplement to Landscape Gardening in Japan*, with collotypes by K. Ogawa, Tōkyō, Hakubunsha (published and sold by Kelly and Walsh), 1893, 40 pages, xl leaves of plates, 37 cm.
————, *Supplement to Landscape Gardening in Japan*, with collotypes by K. Ogawa, 2nd and rev. ed., Tōkyō, Shuyeisha, 1912, xl leaves of plates.
Harada Jirō 原田治郎, *The Gardens of Japan*, Geoffrey Holme (ed.), London, The Studio Ltd., 1928, viii, 180 pages.
————, *The Gardens of Japan*, London, The Studio Ltd., 1956.
————, *The Gardens of Japan*, Boston (Mass.), Charles T. Branford, 1956, 160 pages.
本多錦吉郎『圖解庭造法』、東京、團々社、1890年
————『圖解庭造法』、東京、岡初平、明治23年
————『圖解庭造法』、東京、六合舘、大正元年
————『圖解庭造法』、東京、六合舘、昭和元年
————『圖解日本庭造法』、東京、林平書店昭和10年
————『圖解庭造法——ジョサイア・コンドル英文解説』、東京、マール社、平成19年、全153頁
————, « Japanese Gardens », in Glenn Brown (ed.), *European and Japanese gardens; papers read before the American Institute of Architects*, American Institute of Architects, Philadelphia, Henry T. Coates & Co., 1902, p. 129-156.
————『日本名園畠譜』、東京、小柴英、明治44年、全41頁
————『日本名園畠譜』、東京、平凡社、昭和39年、全103頁
Tamura Tsuyoshi 田村剛, *Art of the landscape garden in Japan*, Tōkyō, Kokusai Bunka Shinkokai, 1935, 245 pages.
————, *Jardin japonais, ses origines et caractères, dessins et plans*, Série A-n° 8, Tōkyō, Kokusai Bunka Shinkokai, 1937, 280 pages.

・そのほか

Gothein, Marie Luise, *Geschichte der Gartenkunst*, Jena, Diederichts, 1926, 2 volumes.
————, *A History of garden art*, edited by Walter P. Wright, London, J. M. Dent & Sons, 1928, 2 volumes.
針ヶ谷鐘吉「コンドル博士の日本庭園觀」、『庭園と風景』第17巻１号、昭和10年、７-９頁
————「造園家としての本多錦吉郎畫伯」、『庭園と風景』第17巻１号、昭和10年、144-148頁
Hearn, Lafcadio, « In a Japanese garden », in *Glimpses of unfamiliar Japan*, Boston-New York, Houghton-Mifflin, 1894, 2 volumes.
片平幸「欧米における日本庭園像の形成と原田治郎の*The Gardens of Japan*」、『日本研究』第34集、国際日本文化センター、平成19年、179-208頁
————「往還する日本庭園の文化史——ジョサイア・コンドルの日本庭園論の考察を中心に」、『*St. Andrew's University Bulletin of the Research Institute*』第35巻２号、平成22年、33-54頁
Piggott, Francis Taylor, *The garden of Japan: a year's diary of its flowers, with four pictures* by Alfred East, 2nd ed., London, George Allen, 1896, 60 pages.
佐藤昌「外國人の見たる庭園」、『園藝學會雑誌』第４巻１号、昭和８年、88-106頁
Schaarschmidt-Richter, Irmtraud, *Der japanische Garten: ein Kunstwerk ; mit einem Aufsatz zur Gartenforschung von Osamu Mori*, Fribourg, Office du Livre, 1979, 327 pages.
鈴木誠『欧米人の日本庭園観』、東京、東京農業大学農学部造園学科、平成９年、全181頁
————「欧米人の日本庭園観」、『ランドスケープ研究』vol. 62, no. 2、平成10年、p. 136-143.
鈴木誠、進士五十八「外国人の日本庭園観に関する比較研究」、『ランドスケープ研究』vol. 52, no. 5、平成元年、p. 25-30.
Taylor, Basil Mrs. (Harriet Osgood), *Japanese gardens, with twenty-eight pictures in colour by Walter Tyndale*, London, Methuen, 1912, 298 pages, 28 planches (再版1928)
渡辺俊夫「歴史性喪失というアイデンティティジョサイア・コンドルの日本庭園論」、稲賀繁美、Patricia Fister編『日本の伝統工藝再考——外からみた工藝の将来とその可能性』、京都、国際日本文化センター、平成17年、p. 75-83.
Weber, Victor Frédéric, 古事寶典 - *Dictionnaire à l'usage des amateurs et collectionneurs d'objets d'art japonais et chinois*, Paris, Chez l'auteur, 1923, 2 volumes ; New York, Hacker Art Books, 1965 (1975), 2 volumes.
横井時冬『藝窓襍載』、東京、明治書院、明治37年、全404頁